

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720067
 研究課題名（和文）ドイツ・モデルネの芸術理論・言語理論における子どもの意味 ベンヤミンを手がかりに
 研究課題名（英文）The meaning of the childhood in modern German philology and art theory - from the romanticism to Walter Benjamin.
 研究代表者
 岡本 和子（OKAMOTO KAZUKO）
 大東文化大学・外国語学部・講師
 研究者番号：50407649

研究成果の概要（和文）：

本研究は、モデルネの批評家ヴァルター・ベンヤミンとロマン主義の作家クレメンス・ブレンターノを取り上げて、両者における子どもと言語の関係に共通点が見出されることを明らかにした。両者において、子どもは樂園喪失を意味する形象であり、子どもの言語は否定性が刻印されているものと捉えられている。ブレンターノの子ども像は、ロマン主義的な「聖なるもの」という子ども像とは一線を画し、近代的な子どもと言語の関係の先駆的モデルを打ち出している。

研究成果の概要（英文）：

This study has indicated that there is a relationship between the image of childhood in the works of Clemens Brentano, a romantic author, and the one of a modern critic Walter Benjamin. Both of them regard children as a figure which has lost the paradise and their language as marked by negativity. Brentano's image of the child is different from so-called "romantic child", namely a symbol of sacredness. It represents a pioneering model for the concept of the child and language in modern literature theory.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	360,000	2,360,000

研究分野：ドイツ文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ドイツ文学、モデルネ、近代、ベンヤミン、ブレンターノ、子ども、言語、芸術理論

1. 研究開始当初の背景

本研究は、言語とは何か、芸術作品とは何

か、という問題に対して、ドイツ近代文学研究という立場からアプローチするという、研究者の研究全体の一部をなすものである。こ

れまでの研究では、芸術作品は人間の精神生活の表出であるという意味で言語にほかならない、という立場から、初期ベンヤミンの芸術批評（とりわけドイツ文学批評）を扱ってきた。そこでは、芸術作品の本質は「形式」に見出されるということを示し、それぞれの芸術形式がもつ意味から、言語としての芸術作品が独自に意味を担う領域を明らかにした。しかし、ベンヤミンの考える芸術作品および言語の概念には、形式という要素のみによっては把握しきれない領域（「模倣」、「遊戯」、「ファンタジー」といった概念によって構成される）が含まれている。この領域は、とりわけ後期ベンヤミンの著作において前景化される「子ども」というテーマ圏と重なり合うと思われる。そのため本研究では、子どもと言語の関係を扱うことによって、形式的認識とは異なる子どもの知覚という側面から、ベンヤミンにおける言語および芸術作品の概念を総合的に明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、ヴァルター・ベンヤミンの著作における「言語」と「子ども」の関係を明らかにすることによって、言語および芸術において「子ども」がもつ意味を、ドイツ・モデルネ文学研究の立場から明らかにすることを目的とした。

一般に「子ども」をめぐるディスクルスにおいては、ヨーロッパで「子ども」が発見されたのは、18世紀後半、とりわけ19世紀に入ってからであるとされているが（フィリップ・アリエス『子どもの誕生』）。その背景には、産業革命に伴う労働形態の変化および都市文化の発達によって、居住形態や教育方法など、子どもを取り巻く環境が変化したこと、この物質的な環境変化に伴って、哲学において、理性や観念に対する絶対的な信頼が揺らぎ、とりわけ子どもにおいて観察しうるような感覚の問題が前面に出てきたことがある。ドイツ文学においては、こうした変化を反映して、ロマン主義の時代から、子どもが大きくテーマ化されている。本研究は、18世紀末から19世紀初頭にかけてのドイツ文学における子どもと言語の関係を踏まえ、たうえで、それと比較しつつベンヤミンにおける子どもと言語の関係をとりわけモデルネという観点から捉えることにより、モデルネの言語理論・芸術理論研究を、子どもという視点から再検討した。具体的には、次の三点を課題とした。

(1) モデルネにおける子どもを取り巻く物質的環境はいかなる意味をもっているか？

(2) 子どもは「もの」をどのように知覚し、言語化するのか？

(3) 言語化された子どもは、どのような意味をもつのか？

3. 研究の方法

本研究の研究方法は、主として文献学的資料の調査・分析であるが、その際に、文学作品・言語理論といった一次資料のほかに、文学研究においては周縁に位置してきた子どもを取り巻く物質的環境（とりわけ、人形やおもちゃ）をも考察の対象とし、そうした物質的なモチーフが文学作品のなかでどのような役割を担っているかを明らかにした。

また、日本国内では入手不可能な資料の蒐集のため、ドイツ国内のアルヒーフや図書館にて、資料収集を行い、研究に役立てた。ドイツ国内での資料収集の概要は、下記の通り。

(1) ベンヤミンの未出版の幼年時代関係の草稿（ベルリン芸術アカデミー内、ヴァルター・ベンヤミン・アルヒーフ）

(2) ドイツ近代における子どもを取り巻く物質的環境についての資料（ベルリン芸術アカデミー、マルク博物館、子ども・青少年博物館）

(3) 1920年代、30年代に発行された子ども・おもちゃに関する図書および言語論関係の図書（ベルリン自由大学図書館、国立図書館）

なお、ロマン主義文学に関する研究状況の把握や意見交換のため、日本アイヒェンドルフ協会に所属して活動を進め、また、19世紀学会において発表を行うことによって、美学や歴史学の専門家らと意見交換をする機会を得て、広い視野から研究を進められるよう努めている。

4. 研究成果

本研究の研究成果は大きく分けて、ベンヤミンの作品に関する研究成果とロマン主義の作家ブレンターノの作品に関する研究成果の二つである。そして、ベンヤミンとブレンターノにおける詩論、および、子どもと言語の関係には、共通性があるということを明らかにした。

(1) ベンヤミンに関する研究

本研究の基礎となるベンヤミンの芸術理論を「痛み」や「生」といった概念を手がかりとして分析した。ベンヤミンにおける「痛み」はつねに、二つの世界のあいだの敷居をまたぐという経験に基づいている。こうした敷居の経験の原型をなすのが、歴史的時間の始まり、およびそれと同時に起こる人間の不完全な言語の誕生である。敷居の経験は、ベンヤミンの芸術理論の根幹をも成している。ベンヤミンは、芸術家の課題とは、素材とし

ての生を、それに死を与えることによって、芸術作品という枠内へと変換することとしている。つまり、芸術理論においては敷衍の経験は、生から死への芸術的変換なのである。

下記で明らかにしたブレンターノの詩論は、生を中心概念としてもつロマン主義の芸術理論よりもむしろ、生を死に変換するというモデルネのベンヤミンの芸術理論との親縁性を持っている。時代が異なる両作家の親縁性を、さらに子どもに対する関心という点から裏付けるための準備として、ベンヤミンの芸術理論を「小さいもの」という観点から考察した。小さいもののなかに、人間の言語が負っている否定と歪みのしるしを見出すベンヤミンは、縮小という手法をみずからの著作で用いることによって、否定を本質とする人間の言語を救い出そうと試みている。その試みが、ベンヤミンによる幼年時代の記述である。これをベンヤミンは「縮小して送ること」として捉えている。子どもという視点からベンヤミンの芸術理論を考察することによって、子どもをテーマとするドイツ文学の作品の位置を改めて検討するための足掛かりが得られた。

ベンヤミンの著作における「子ども」と「言語」の関係を表わす事象として、実践と理論の双方にまたがるベンヤミンの子どもの本の蒐集を取り上げた。ベンヤミンによる子どもの本の蒐集の重点は、19世紀の手彩色の絵本と文字学習絵本にある。色彩および文字学習に対する関心の根底にあるのは、子どもの言語獲得という問題である。ベンヤミンによる子どもの本の蒐集とは、子どもがどのように言語を獲得するか、ということに記述しようとする試みである。この意味で、ベンヤミンの子どもの本の蒐集は、幼年時代（言語をもたない状態）の記述の試みの一つと見なすことができる。ベンヤミンにおける「蒐集」とは、事物を言語というシステムのなかに位置づけることであり、この言語システムは、蒐集という行為によって変化してゆく、ダイナミックなものなのだ。

(2) ブレンターノに関する研究

ブレンターノにおける子どもと言語の関係を明らかにするために、ブレンターノの詩論を明らかにした。「人形」と「死」をキーワードとして展開されるブレンターノの詩論は、ベンヤミンの芸術理論と照らし合う。両者とも、素材としての生に死を与えることが、芸術作品を成立させる動力であると見なしている。また、ブレンターノにおける死と結びついた人形が、当時の人形をめぐる言説のなかにどのように位置づけられるかを示した。「生を得る人形」というピグマリオン的な人形とは逆の、死の表象としての人形は、20世紀の作品にも見出される、新しい人形像

を示していると言える。

ブレンターノの作品における子どもはどのようなイメージで描かれているのか、また、子どもと言語の関係はどのように捉えられているのかについて考察した。ブレンターノにおける子どもは、19世紀のドイツ文学における一般的な捉えられ方とは違って、楽園にいる無垢な存在ではなく、むしろ楽園が失われたことを証し立てる存在である。子どもの言語は否定性に満ちており、否定性をもった子どもの言語は、人間の言語の不完全性という側面を強調するものであり、芸術の創造に関わる言語に通じていることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

岡本 和子、「芸術的変換装置としての物語 C: ブレンターノの『平和人形の入った箱』」、『ドイツ文学』(日本独文学会) 査読有、第138号、2009年、204-217頁

[学会発表](計4件)

岡本 和子、「言語というアーカイヴ ベンヤミンの『蒐集』をめぐる」、19世紀学学会シンポジウム「近代とミュージアムの成立」、2010年1月9日、新潟大学

岡本 和子、「ベンヤミンと子どもの本」、科学研究発表会「ドイツ近・現代文学における 否定性 の契機とその働き」(基盤研究B) 2009年9月20日、九州大学

岡本 和子、「ヴァルター・ベンヤミンにおける小さいものの理論」、科学研究発表会「ドイツ近・現代文学における 否定性 の契機とその働き」(基盤研究B) 2008年9月14日、九州大学

岡本 和子、「クレメンス・ブレンターノ『ゴッケル、ヒンケル、ガッケライア』における子どもの言語」、科学研究発表会「ドイツ近・現代文学における 否定性 の契機とその働き」(基盤研究B) 2007年9月15日、九州大学

[図書](計2件)

Hrsg. von Lothar Knatz, Nobuyuki Kobayashi und Takao Tsunekawa) Youichi Kubo, Michael Mandelartz, Jiro Watanabe, Tanehisa Otabe, Nobuyuki Kobayashi, Gian Franco Frigo, Kazuko Yamaguchi, Kazuko Okamoto, Yakao Tsunekawa, Lothar

Knatz, Königshausen&Neumann, Leben und Geschichte. Studien zur deutschen Geistesgeschichte des 19. und 20. Jahrhunderts, 2008, 総頁数 200 頁 (担当 119-130 頁)

Hrsg. von Yoshihiko Hirano, Christine Ivanovic, Y. Hirano, C. Ivanovic, T. Pekar, H. Varopoulou, H.-T. Lehmann, Y. Koda, G. Brandstetter, G. Stumpp, D. Goltschnigg, R. Gorner, M. Kawanaka, G. Neumann, K. Omiya, S. Kitagawa, K. Okamoto, M. Reithmann, Königshausen&Neumann, Kulturfaktor Schmerz, 2008, 総頁数 257 頁 (担当 218-232 頁)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 和子 (OKAMOTO KAZUKO)
大東文化大学・外国語学部・講師
研究者番号 : 50407649